

兵庫縣衛生課長地方技師 岡田良一

寄生蟲豫防に関する調査報告(上卷)

国立公衆衛生院附属図書館

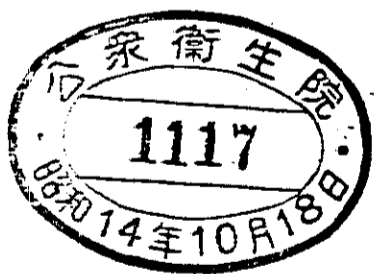
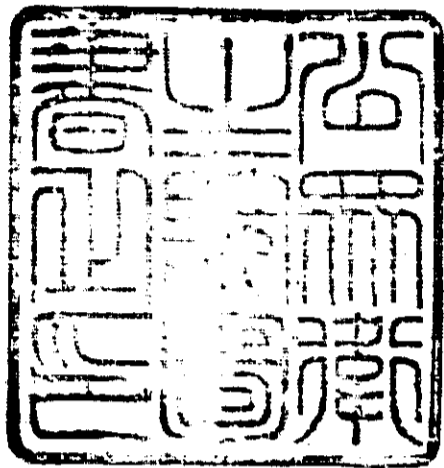


\*00032646\*

兵庫縣衛生課長地方技師 岡田良一

寄生蟲豫防に關する調査報告 [上卷]

P-A
上
2



昭和五年十二月廿七日

兵庫縣衛生課長地方技師 岡田良一

內務省衛生局長 赤木朝治 殿

昭和四年七月全國衛生技術官會議ノ節御下命相成候寄生蟲豫防ニ關スル件調  
査ノ結果別冊ノ通り及報告候也

## 緒言

現代我國の寄生蟲學は長足の發達を遂げて多數の研究業績が續々として發表されて居る。これを歐米諸國と比較しても何等の遜色がなく其大部分に於ては反つて優越して居ることは寔に欣快に堪へない。

この様に顯者な發達を遂げたのは一つに我國の研究者の不撓不屈な研鑽に負ふ所が甚大であるのは勿論であるが一面には我國に研究材料が豊富であると云ふ證據にもなると思ふ。實際我國には一二の特種なものを除く外は殆んど凡ての種類の寄生蟲が然も濃厚に侵淫して居ることは國民保健の衝に當る者は勿論一般識者の等しく憂ふる所である。

偶々予は昭和四年七月全國衛生技術官會議席上衛生局長閣下より寄生蟲豫防に關する調査命令を受けたので淺學非才を願ず之に従事して得た諸種の調査材料に、研究室内及野外に於ける私自から行ふた小實驗成績を加へて茲に其成績を取纏め御報告する次第である、將來此道に従事せられんとする篤學者並に公衆衛生關係者に對し聊かにても參考資料ともならば望外の仕合である。終りに本報告作製に當りて各般の便宜を與へられ且つ指導獎勵せられた宮川教授並に各方面の尊敬する諸家及び材料蒐集に多大の便を與へられた内務省衛生局、各府縣の好意に對して滿腔の謝意を表すると同時に兵庫縣衛生課員諸君の不斷の御助力を感謝する次第である。

# 寄生蟲豫防に關する調査報告 [上卷]

## 目次

第一章 寄生蟲學史	一頁
第一節 古代史	一
第二節 近代史	二
第二章 寄生蟲の分布	五
第一節 寄生蟲の分布の原因	五
第二節 寄生蟲の分布	七
第一項 線蟲類	七
一、蟻	七
二、蛔蟲	七
三、東洋毛線蟲	七
四、「ストロンギロイデス、ステルコラーリス」	八
五、「ラブダイデイス、ホミニス」	八
六、十二指腸蟲	八
七、住糸狀蟲及び「バンクロフト」氏糸狀蟲	九
八、「ドラクンクルス、メデイネンシス」「メデイナ蟲」「ギネア蟲」	九
九、鞭蟲	九
一〇、旋毛蟲	一〇
第二項 吸蟲類	一〇
一、肝蛭	一〇

二、肥大吸蟲……………10

三、肺「チストマ」……………10

四、肝臟「チストマ」……………11

五、横川氏「メタゴニムス」……………11

六、「ヘテロフィエス、ヘテロフィエス」……………11

七、日本住血吸蟲……………11

八、埃及住血吸蟲……………11

九、「マンソン」氏住血吸蟲……………11

第三項 條 蟲 類……………11

一、裂頭條蟲……………11

二、「リグラ」狀幼裂頭條蟲……………11

三、大殖門裂頭條蟲……………11

四、芽殖幼裂頭條蟲……………11

五、「ヒメノレビス、ナナ」(茶小條蟲)……………11

六、「ヒメノレビス、デイミヌータ」……………11

七、「ダヴェーネア、マダガスカリエンシス」……………11

八、有鉤條蟲……………11

九、無鉤條蟲……………11

一〇、狗兒條蟲……………11

第三節 寄生蟲の壽命……………11

第一項 線 蟲 類……………11

一、十二指腸蟲……………11

二、旋 毛 蟲 類……………11

第二項 吸 蟲 類……………11

一、肝臟「チストマ」……………11

二、肺臟「チストマ」……………11

第三章 寄生蟲感染事情

第一節 土地と寄生蟲……………11

第一項 十二指腸蟲類……………11

第二節 水と寄生蟲……………11

一、日本住血吸蟲……………11

二、「バンクロフト」氏糸狀蟲……………11

第三節 飲食物と寄生蟲……………11

第一項 野 菜 類……………11

第二項 肉 類……………11

甲、豚肉より來るもの……………11

一、旋 毛 蟲……………11

二、有鉤條蟲……………11

乙、牛肉より來るもの……………11

一、無鉤條蟲……………11

丙、魚肉より來るもの……………11

一、擴節裂頭條蟲……………11

二、肝臟「チストマ」……………11

三、横川氏「メタゴニムス」……………11

四、「ヘテロフィエス、ヘテロフィエス」……………	三六
丁、蟹より来るもの……………	三六
一、「肺」チストマ……………	三六
第三項 飲 用 水……………	四〇
一、「肝臓」チストマ……………	四〇
二、「メタゴニムス」及び「ヘテロフィエス」……………	四一
三、「肺」チストマ……………	四一
四、「フラスシオロプシス、ハスキー」……………	四一
五、肝 臓……………	四一
六、「メジナ」蟲……………	四一
七、「リグラ」狀幼裂頭條蟲……………	四一
第四項 飲用水及其他の飲食物……………	四一
一、「ナナ」條蟲……………	四一
二、「ヒメノレービス、ディミメータ」……………	四一
三、「テニア、エヒノコツクス」……………	四一
四、瓜 實 條 蟲……………	四一
五、工場の寄生蟲……………	四一
五項 其他一般の飲食物……………	四一
第四節 職業と寄生蟲……………	四一
第一項 坑内労働者と寄生蟲……………	四一
第二項 農業と寄生蟲……………	四一
第三項 本縣に於て施行した職業別寄生蟲調査……………	四一
一、農村の職業別寄生蟲……………	四一
二、市部の職業別寄生蟲……………	四一
三、特種業者の寄生蟲……………	四一
四、他府縣の職業別寄生蟲……………	四一
五、工場の寄生蟲……………	四一

六、植民地の職業別寄生蟲……………	四一
第五節 野糞と寄生蟲……………	四一
第六節 菜糞と寄生蟲……………	四一
第四章 寄生蟲と年齢……………	四一
第一節 「ナナ條蟲」の場合……………	四一
第二節 十二指腸蟲の場合……………	四一
第三節 蛔蟲の場合……………	四一
第四節 犬十二指腸蟲の經口的竝に經皮的感染に關する實驗的研究……………	四一
第一項 犬十二指腸蟲の固有宿主(犬)に於ける初感染率再感染率及重感染率に就て……………	四一
第二項 犬十二指腸蟲の經口的竝に經皮的に感染せし場合の運命……………	四一
第五章 寄生蟲の免疫……………	四一
第一節 吸 蟲 類……………	四一
第二節 線 蟲 類……………	四一
第六章 人體寄生蟲の中間宿主……………	四一
第一節 節 足 動 物……………	四一
第一項 甲 殼 類……………	四一
甲、切 甲 類……………	四一
一、「ジオプロトメス」屬……………	四一
二、「シクロツプス」屬……………	四一
乙、軟 甲 類……………	四一
第二項 昆 蟲 類……………	四一

甲、双翅類.....一四

一、蚊科.....一四

二、搖蚊科.....一五

三、蚋科.....一五

四、虻科.....一五

乙、蚤目.....一五

丙、虱目.....一五

丁、食毛目.....一五

戊、鱗翅目.....一五

己、直翅目.....一五

庚、鞘翅目.....一五

第三項 多足類.....一五

第二節 軟體動物.....一五

第一項 栉鰓類.....一五

一、「にいな」科.....一五

二、「アンブラリア」科.....一五

三、「リツソ」科.....一五

A、「トリギニリナ」亞科.....一六

B、「マメタニシ」亞科.....一六

第二項 有肺目.....一六

一、「ものあら」貝.....一六

二、「プリムス」科.....一六

三、「ひらまき」貝.....一六

第三節 脊椎動物.....一六

第一項 魚類.....一六

第二項 蛙蛇鳥類.....一六

第三項 哺乳類.....一六

附記 人體寄生蟲の傳搬者としての植物.....一六

第七章

寄生蟲の感染経路

第一節 一般寄生蟲の感染経路.....一六

一、食物.....一六

二、水.....一六

三、糞便.....一六

四、移住.....一六

第二節 一般線蟲類の感染経路.....一六

第三節 一般吸蟲類の感染経路.....一六

第四節 一般條蟲類の感染経路.....一六

第五節 線蟲類の感染経路.....一六

第一項 十二指腸蟲の感染経路.....一六

一、仔蟲の宿主體外に於ける仔蟲の發育.....一六

二、宿主體内に於ける仔蟲の發育.....一六

三、感染経路.....一六

四、経皮的感染の場合に於ける宿主體内移行路.....一六

五、経口的感染の場合に於ける仔蟲の體内移行路.....一六

六、経口と経皮と其何れが主要感染経路であるか.....一六

第二項 六十二指腸蟲の感染に際し仔蟲の爲す肺循環の生物學的意義 (其の一)(其の二).....一六

第三項 東洋毛線線蟲.....一六

第四項 蛔蟲類.....一六



甲、蛔蟲の感染経路.....三三七

一、中間宿主存在説.....三三七

二、卵直接感染説.....三三七

三、蛔蟲仔蟲の体内移行路.....三三七

四、経皮感染.....三三七

五、子宮内感染.....三三七

六、人類に於ける蛔蟲の感染経路.....三三七

七、乳兒の感染に就いて.....三三七

乙、蟻蟲の感染経路.....三三七

一、自家感染.....三三七

第五項 鞭蟲の感染経路.....三三七

第六項 旋毛蟲.....三三七

第七項 「フィラリア」類の感染経路.....三三七

一、「フィラリア、バンクロフト」.....三三七

二、「フィラリア、ロブ」.....三三七

三、「ドラクンクルスメヂネンシス」.....三三七

第八項 「アンギオストミイデ」類.....三三七

一、「ストロンギロイデス、ステルコラーリス」の感染経路.....三三七

二、「ユウストロンギル、ギガス」の感染経路.....三三七

第六節 吸蟲類の感染経路.....三三七

第一項 住血吸蟲の感染経路.....三三七

第一、日本住血吸蟲の感染経路.....三三七

一、経皮感染.....三三七

二、経口感染否定.....三三七

三、先天性(胎盤性)感染.....三三七

四、中間宿主.....三三七

五、「ミラチヂイム」の發育.....三三七

六、「セルカリヤ」の形態.....三三七

七、「セルカリヤ」の運動.....三三七

八、宿主体内に於ける發育.....三三七

九、「宿主体内に於ける移行経路」.....三三七

第二、「シストゾーマ、ハマトビウム」(埃及住血吸蟲).....三三七

第三、「シストゾーマ、マンソニー」.....三三七

第四、住血吸蟲.....三三七

第二項 肝臟「チストマ」一名 形二口蟲.....三三七

一、卵.....三三七

二、第一中間宿主.....三三七

三、「セルカリヤ」の構造.....三三七

四、「セルカリヤ」の生存期間.....三三七

五、第二中間宿主.....三三七

六、被胞囊幼蟲の形態.....三三七

七、被胞囊幼蟲の抵抗力.....三三七

八、被胞囊幼蟲の感染経路.....三三七

九、終結宿主内の發育.....三三七

一〇、宿主寄生期間.....三三七

第三項 肺臟「チストマ」.....三三七

一、蟲 卵.....三三七

二、幼蟲の發育.....三三七

三、第一中間宿主.....三三七

四、「セルカリヤ」.....三三七

五、第二中間宿主.....三三七

六、蟹體に見らるる包囊幼蟲.....三三七

七、蟹を中間宿主とする別種の吸蟲.....三三七

八、終結宿主体内移行..... 三五

九、肺臟「チストマ」感染経路と包囊幼蟲の抵抗力..... 三五

第四項 「ヘテロフィヘーデ」類..... 三七

第一、「メタゴニムス、ヨコガワイ」..... 三七

二、「ツニルカリヤ」の形態..... 三七

三、第二中間宿主..... 三七

四、被胞囊幼蟲の形態..... 三七

五、終結宿主体内の發育..... 三七

六、人體感染経路..... 三七

七、胞囊幼蟲の理化學的作用に對する抵抗力..... 三七

甲、熱に對する抵抗力..... 三七

乙、酸に對する抵抗力..... 三七

丙、醬油に對する抵抗力..... 三七

第二、其他の「ヘテロフィニス」屬吸蟲の感染経路..... 三七

一、「ヘテロフィニス」..... 三七

第五項 「フラスシオロプシス、バスキイ」肥大吸蟲..... 三七

一、中間宿主体内の仔蟲の發育..... 三七

二、宿主体内の發育..... 三七

三、感染経路..... 三七

第六項 「フラスチオラ、ヘバテイカ」の感染経路..... 三七

一、中間宿主..... 三七

二、「ツニルカリヤ」の形態..... 三七

三、胞囊形成..... 三七

四、感染経路..... 三七

五、宿主体内移行経路..... 三七

第七節 條蟲類の感染経路

第一項 二吸具類..... 三七

第一、擴節裂頭條蟲..... 三七

一、第一中間宿主..... 三七

二、感染経路..... 三七

三、幼蟲の抵抗力..... 三七

第二、「ディボトリオセファルス、デシビュニス」リグラ裂頭條蟲..... 三七

一、卵子の形態及發育..... 三七

二、第一中間宿主及六鉤幼蟲の發育..... 三七

三、第二中間宿主..... 三七

四、感染経路..... 三七

四、吸具類..... 三七

第一「テニアゾリウム」(有鉤條蟲)..... 三七

一、六鉤幼蟲の發育..... 三七

二、人體に囊蟲が形成する場合..... 三七

三、感染経路..... 三七

四、囊蟲の生命及抵抗力..... 三七

五、豚の感染率..... 三七

第二、「テニアザギナータ」(無鉤條蟲)..... 三七

一、六鉤幼蟲の發育..... 三七

二、感染経路..... 三七

三、牛肉内の囊蟲の抵抗力..... 三七

第三、「ナナ」條蟲(萎小條蟲)..... 三七

一、宿主体内に於ける發育..... 三七

二、人體内に於ける蟲卵嚙下試験..... 三七

三、感染経路..... 三七

- 四、宿 主..... 三六一
- 第四、「ヒメノレービス、デイミヌータ」..... 三六一
- 第五、「デイビリヂウム、カニイヌム」(爪實條蟲)..... 三六一
- 第六、「デーニア、エヒノコツクス」(狗兒條蟲)..... 三六一
- 一、中間 宿 主..... 三六二
- 二、六鉤幼蟲の發育..... 三六二
- 三、多房性胞蟲..... 三六二
- 四、胞蟲の發育..... 三六二
- 五、感 染 經 路..... 三六二

### 第八章 寄生蟲と貧血

#### 第一節 十二指腸蟲貧血

- 第一項 出血性貧血..... 三六〇
- 第二項 消化器障礙性貧血..... 三六〇
- 第三項 中毒性貧血に就いての諸説..... 三六〇
- 第四項 十二指腸蟲性貧血の場合の血液の性状..... 三六〇
  - 一、網狀赤血球..... 三六一
  - 二、多染性赤血球..... 三六一
  - 三、赤血球大小不同症..... 三六一
    - A、小型赤血球..... 三六一
    - B、大型赤血球..... 三六一
  - 四、赤血球異形症..... 三六一
  - 五、有核赤血球結核遺殘體..... 三六一
  - 六、鹽基性顆粒赤血球..... 三六一
  - 七、本病患者の赤血球數、血色素量及色素係數..... 三六一
  - 八、白血球數..... 三六一
  - 九、赤血球酸素消費量..... 三六一

- 一〇、酸素消費量と網狀赤血球との關係..... 三六二
- 一一、赤血球の低張食鹽水に對する抵抗..... 三六二
- 一二、類脂體溶解性血液毒素「サボニン」溶液に對する赤血球抵抗試驗..... 三六二
- 一三、血液内の「リパーゼ」含有量測定..... 三六二
- 一四、「リポイド」比率..... 三六二
- 一五、十二指腸蟲病血液粘稠度に就て..... 三六二
- 一六、血液内の「アルブミン」「グロブリン」量の變化..... 三六二
- 一七、十二指腸蟲病貧血血液に就いての血清蛋白質..... 三六二
- 一八、血 糖..... 三六二
- 一九、赤血球の沈降速度..... 三六二
- 二〇、十二指腸蟲性貧血の成因に關する見解..... 三六二
- 二一、溶血性「リポイド」説..... 三六二
- 二二、蛋白質様「コロイド」説..... 三六二
- 二三、健康者の血液中に於ける網狀赤血球數に關する諸家の報告..... 三六二
- 二四、健康者の血液酸素消費量の諸家の測定したる成績..... 三六二
- 二五、本蟲病貧血患者及健康者血液内の「コレステリン」「レチチン」及總脂肪酸量を定量したる諸家の報告..... 三六二
- 二六、線蟲類中貧血を招來すべき寄生蟲一覽表..... 三六二

#### 第二節 吸蟲類と貧血

- 第一項 日本住血吸蟲病性貧血..... 三六七
  - 一、本病性貧血血液所見..... 三六七
  - 二、本病性貧血臟器の變化..... 三六七
  - 三、本蟲病貧血の原因に就いて..... 三六七
- 第二項 肝臟「チストマ」と貧血..... 三六八
  - 一、貧血の成因に對する見解..... 三六八
  - 二、肝臟「チストマ」病患者の合併なきもの、赤血球及赤色素を調査したる成績..... 三六八

三、肝臓「チストマ」患者の血液を檢査したる成績表……………四三  
 四、肝臓「チストマ」病患者卅七名中の血液檢査平均數……………四六  
 第三節 條蟲性貧血……………四七

第一項 二吸具類……………四七  
 一、擴節裂頭條蟲……………四七  
 二、「ディプロゴノホルス、グランディス」……………四八  
 第二項 四吸具類……………四八  
 一、「チクロフネリチア」……………四八  
 二、「ヒメノレビーチイデニ」……………四九  
 A、「ナナ」條蟲……………四九  
 B、「ヒメノレビス、ディミヌータ」……………四九  
 第三項 條蟲類に於ける貧血を招來す可き寄生蟲一覽表……………五〇

第九章 寄生蟲の病害……………五一

甲、線蟲類の病害……………五一

第一節 十二指腸蟲の病害に就て……………五一  
 一、消化器障礙……………五一  
 二、血行器障礙……………五一  
 三、神經症狀……………五一  
 四、皮膚病……………五一  
 第二節 蛔蟲の病害に就て……………五一  
 一、消化器障礙……………五一  
 二、蛔蟲性腸閉塞症……………五一  
 三、蛔蟲の異所轉位性による各臓器の病害……………五二

第三節 鞭蟲の病害……………五二  
 第四節 蟯蟲の病害……………五三  
 第五節 「トリヒノージス」旋毛蟲病……………五三  
 第六節 「ストロンギロイデスステルコラーリス」の病害……………五三  
 第七節 「フィラリヤ」症……………五三  
 乙、吸蟲類の病害……………五三  
 第一節 日本住血吸蟲の病害……………五三  
 第二節 肝臓「チストマ」(形二口蟲)の病害……………五三  
 第三節 肝蛭の病害……………五三  
 第四節 肺「チストマ」の病害……………五三  
 第五節 「メタゴニムス、ヨコガワイ」の病害……………五三  
 丙、條蟲類の病害……………五三  
 第一節 擴節裂頭條蟲の病害……………五三  
 第二節 「リグラ」狀裂頭條蟲の病害……………五三  
 第三節 無鉤條蟲の病害……………五三  
 第四節 有鉤條蟲の病害……………五三  
 第五節 狗兒條蟲の病害……………五三  
 第六節 萎小條蟲の病害……………五三  
 第十章 寄生蟲檢査法……………五三

第一節 糞便中に存する蟲卵檢出法

- 一、「バックス」氏法.....四四五
- 二、「チレマン」氏法.....四四五
- 三、宮川 氏 法.....四五五
- 四、矢尾板氏法.....四五六
- 五、北村勝三、宮下耕氏等の法.....四五六
- 六、高橋弘氏の法.....四五六

第二節 含卵糞便から仔蟲を培養する法

- 一、宮川氏培養法.....四五六

第三節 蟲卵の數量的檢査法

第四節 血液中の仔蟲の檢査

- 一、血滴檢査法.....四五二
- 二、「ミクロファイラリヤ」集蟲法.....四五二

第五節 尿中の檢査

第六節 咯痰の檢査

第十一章 糞便内に於ける寄生蟲卵撲滅法

- 第一節 蟲卵の温熱に對する抵抗力.....四五四
- 第二節 乾燥に對する抵抗.....四五五
- 第三節 日光に對する抵抗.....四五五
- 第四節 蟲卵と空氣(酸素)との關係.....四五五
- 第五節 種々なる藥品に對する抵抗.....四五五

第六節 糞便の酸酵作用及人尿の卵に及ぼす影響

第七節 改良便池に就きて

第八節 野糞に就きて

第九節 糞便内寄生蟲卵撲滅に就きての結論

普通使用する消毒劑に對する抵抗力表.....四五〇  
 炭酸「アンモニウム」液に對する十二指腸蟲仔蟲の抵抗力表(宮川氏).....四五二  
 低温に於ける蛔蟲抵抗力試驗表(淺田氏).....四五三  
 糞尿液中に於ける十二指腸蟲卵の生存期間.....四五三  
 十二指腸蟲卵の生存期間と季節.....四五三

第十二章 寄生蟲の驅除法

第一節 線蟲類(ストロンギリデー)

- 第一項 腸内寄生蟲驅除に際しての注意.....四六八
- 第二項 十二指腸蟲 及亞米利加十二指腸蟲の驅除.....四六八
- 一、前 處 置.....四六八
- 二、驅蟲劑と處方例.....四六八
- イ、「チモール」.....四六八
- ロ、綿馬越幾斯.....四六八
- ハ、「ナフトリン」.....四六八
- ニ、「ナフトール」.....四六八
- ホ、「クロ、ホオルム」.....四六八
- ヘ、「オヒカリブツス」油.....四六八
- ト、四鹽化炭素.....四六八
- チ、四鹽化「エチレン」.....四六八

リ、「ネマトール」……………四六六

第三項 東洋毛様線蟲……………四七〇

第四項 蛔蟲類……………四七〇

一、蛔蟲の驅除法……………四七〇

二、驅除藥……………四七〇

イ、「サントニン」……………四七〇

ロ、「フロスマミン」(サントニン酸ナトリウム)……………四七〇

ハ、海仁草……………四七〇

第五項 蟻類……………四七〇

一、蟻の驅除法……………四七〇

イ、服藥による法……………四七〇

ロ、洗腸による法……………四七〇

ハ、肛門塗擦法……………四七〇

第六項 「フィラリヤ」類の驅除……………四七〇

第七項 「アングオストミーチ」類……………四七〇

一、「ストロンギロイデス、メテロコラーリス」の驅除法……………四七〇

ハ、肛門塗擦法……………四七〇

第二節 吸蟲類……………四七〇

第一項 住血吸蟲……………四七〇

一、日本住血吸蟲の驅除……………四七〇

イ、吐酒石……………四七〇

ロ、「スキブナール」……………四七〇

ハ、「ネオスチブナール」……………四七〇

ニ、鹽酸「エチメン」……………四七〇

第三項 「オビスソルギーデ」類……………四七〇

一、「肝臟」(「チストマ」)一名「形二口蟲」の驅除……………四七〇

イ、「ネオスチブナール」……………四七〇

ロ、「ネオスチブナール」の治療實驗……………四七〇

ハ、「ネオスチブナール」注射による蟲體及蟲卵の變化……………四七〇

ニ、「ネオスチブナール」の使用量……………四七〇

二、「オビスソルギス、フェリネウス」……………四七〇

第三項 「ツログロトレマチーデ」類……………四七〇

一、肺「チストマ」の驅除……………四七〇

第四項 「ヘテロフキーデ」類……………四七〇

一、「メタゴニムス、ヨコガワイ」の驅除……………四七〇

第五項 「フアスチオリーデ」類……………四七〇

「フアスシオロプシス、ハスキイの驅」……………四七〇

第三節 條蟲類……………四七〇

第一項 條蟲の驅除……………四七〇

一、前處……………四七〇

二、驅蟲劑……………四七〇

イ、縮馬越幾斯……………四七〇

ロ、「フキルマロン」及「フキルマロン」油……………四七〇

ハ、「ヒツキストラクツム、アスピット、スピネロース」……………四七〇

Extraction Aspid Spindles.

ニ、「ゼビローヤ」(「ヒ」)「チニオール」……………四七〇

ホ、柘榴根皮……………四七〇

ハ、「コン」花……………四七〇

ト、「カマイラ」……………四七〇

三、團體的驅除法に就いて……………四七〇

四、驅除の時期……………四七〇

第十三章 寄生蟲驅除を主治效能にする賣藥調査……………四七〇

第一節 寄生蟲驅除を主治效とする賣藥に就いて…………… 五三

第二節 廳府縣の寄生蟲賣藥一覽…………… 五五

第十四章 寄生蟲驅除民間藥調査…………… 五三

第一節 寄生蟲驅除の民間藥に就いて…………… 五三

第二節 廳府縣寄生蟲民間藥一覽…………… 五三

一、蛔蟲驅除藥…………… 五三

二、十二指腸驅除藥…………… 五四

三、條蟲驅除藥…………… 五五

四、一般驅除…………… 五五

第十五章 寄生蟲驅除に關する口碑、傳説、禁厭、迷信…………… 六四

第一節 口碑…………… 六五

第二節 傳説…………… 六三

第三節 禁厭…………… 六三

第四節 迷信…………… 六三

目次 (終)

寄生蟲豫防に關する調査報告

第一章 寄生蟲學史

第一節 古代史

寄生蟲に關する最古の記録は埃及王朝時代(紀元前十六世紀頃)のもので、エーベルス<sup>1)</sup>の發見した記録である。「パピルス、エーベルス」Papyrus Tabletsに表はされて居る象形文字には Helix と云ふ語によつて寄生蟲を示し、それが疾病の原因であることを記して居る。

その記録には埃及住血吸蟲病及び十二指腸蟲病に關する記事とでも考へられる様な部分があると云ふ。

人體寄生蟲に關する考古學的證據としてはルプラー氏 Ruffo (一九一〇)が第二十王朝時代(紀元前一〇九〇—一〇〇〇年)の二個の木乃伊から、その泌尿器系統に埃及住血吸蟲の石灰化した卵子を見出したことである、これによつてナイル<sup>2)</sup>三角洲に現今も流行して居る同吸蟲病が三千年の昔に於ても存在したことを知ることが出来る。

ヘブライ人の遡率して居るモーゼの教戒中には寄生蟲に關する衛生的注意が詳細に示されて居るのを見る。シナイの荒野である「火の蛇」は現今の「フラクンクルス」を指すものに他ならない、モーゼの掟には其蟲體を棒に巻きて引き出す方法をも指示して居る、又食用動物を寄生蟲の存否によつて汚れたものと汚れないものとに分け廢敗物を食べる動物例へば豚、駱駝、食肉鳥、爬蟲類、蝸牛等を食することを嚴禁し、且又汚染した水を飲まない様に警告した後、ヘブライ人は直接水流に口をつけて飲むことなく、手に拘ひて飲む様に教へられた、この習慣は「フラクンクルス」等の豫防として有效であつたのであらう。

希臘ではアリストテレスが條蟲に就いて記述しヒポクラテスは「エキノコックス」病の診斷に就いて述べた。紀元後の興味ある醫學的古記録であつて寄生蟲病に就いて詳細に述べたのはフシビアの學者アウイセンナ Avicenna (981—1037)の醫書である、これには四種の寄生蟲(恐らく、蛔蟲、有鉤條蟲、蟯蟲、十二指腸蟲等)を指すものであらう(を擧げ、それによつて起る病氣の徴候、驅蟲法等を詳しく述へ驅蟲劑として當時既に綿馬根 Flix Mantis を推奨したのは注目すべきことである)。

我が東洋でも蛔蟲、條蟲等に關する記録は遠く紀元前に溯つて見れば先づ條蟲は古く白蟲、寸白等の名によつて知られ、平安朝時代に書かれた我國最古の醫書である丹波康賴氏の著した「醫心方」(永觀二年紀元九八四年)には白蟲病の記事がある、此の書が主に據つた異元方の「病源候

論「には一寸白者長一寸、色白、形小福、或飲白酒、以桑樹皮貫牛肉炙食、拜生栗所成」とあり。又「食生魚後、即飲乳酪、亦令生之」ともあり「此蟲長一尺則令人死」ともありと、支那にて白蟲と云ふのは多くは有鉤條蟲か無鉤條蟲を指すものであらうが我國では食物の關係上更に横節頭類條蟲を意味したものであらう。

古書にある長蟲、食蟲、蝨蟲、蝨蟲、石蚘、等の名稱はすべて蠅蟲を指すものであると云ふ、素門(紀元前一五〇年頃)には長蟲、蠅(同)には蚊蚘と呼んだ。漢、唐の著名なる醫書である傷寒論、食匯要略、病源候論等には何れも蠅蟲に関する記事がある、我國では丹波康賴氏の「醫心方」に病源候論と同様の記事がある、その後徳川の中世になつて、松植彰常氏の「楚雜錄」(享和元年一八〇一年)、高玄龍氏の「蟲鑑」(文化六年一八〇九年)、糟谷駿夫氏の「蠅蟲發見」(天保四年、一八三三年)喜多村直氏の「蠅誌」(文政三年一八二〇年)等蠅蟲病に関する専門書がある、それらの中には臨床的觀察の周到なことは感嘆に値するものがあると云はれて居る。

十二指腸蟲病も早くより知られた様である、即ちふくびやう(浮苦病)、あをのびやう(阿還の病)、さかのした(坂下)等と云ふ支那醫書にある黄伴病、犯土腫、黄腫伴病等を云ふて居る。貧血病の多くは十二指腸蟲病であると云ふ、原南陽氏の「叢柱亭醫事小言」(享和三年一八〇三年)には頗る正確な症状の記載がある。

日本住血吸蟲病も備後片山地方では餘程古くより知られ弘化四年(一八四七年)に出た藤井好直氏の「片山記」は本病に関する古典的著述である、甲斐の流行地でも文久年間から既に醫俗の間に知られて居つたと云ふことである。

### 第二節 近代史

近代に於ける寄生蟲學の發達は最初に發見せられし吸蟲は家畜の肝臓に寄生して所謂 Leber-flecke, liver rot を起す寄生蟲である肝蛭で一三七九年 Johann de Brie 氏の記述したところである。

この蟲は一五四七年ガブチヌス Galvani 氏によつて更に詳しく記載された。顯微鏡學の先驅者として有名であるレーウエンフック Leuwenhook 氏(一六七五年)スワンメルダム Swammerdam 氏(一七五二年)、ローゼンホッフ Rosenthal 氏(一七五八年)シニラー Miller 氏(一七七七年)等を始めとしてゲーツェ Goetze 氏(一七八七、一八〇〇年)ツエーダー Zeller (一八〇〇年)等の諸氏は各種の吸蟲を觀察した、吸蟲はもと蛭の類と混同せられて居つたもので Trematoda と云ふ現今の名前は ルドルフイ Reinhold 氏が一八〇八年に設けたものである、十九世紀になるとメーリス Mehlis (一八三一年)、ノルドマン Nordmann (一八三二年)、ジーボルト Bialski (一八三五年)ステーンストルム Steensrud (一八四二年)フィリップス de Filippi (一八五七年)ラヴァレット La Vallette (一八五五

年)、パーゲンスツツ(Pagenstecher) (一八五七年)等の學者が出て基礎的研究を積み一八八三年になつてロイカルト Reikardt 氏及びトーマス Thomas 氏の劃期的業績の出現を見る様になつた、即ち兩氏は夫々獨立に肝蛭の全生活史を闡明し吸蟲類の生代の交番を完全に研究した、之より先きバニク Banik 氏は支那で肥大吸蟲を發見し(一八四三年)ピルハルツ Pilsch 氏は埃及で埃及住血吸蟲 Fasciola hepatica 氏及び「ヘテロフィニス、ヘテロフィニス」を發見した(一八五一年)續いてマコンネル Mc Connell 氏は一八七四年「肝臟チストマ」をケルヘルト Kohout (一八七八年)及びリッガー Ringier 氏(一八七九年)は「肺臟チストマ」を桂田富士郎氏(一九〇四年)は日本住血吸蟲を發見した、「マンソン」氏住血吸蟲と本来の埃及住血吸蟲との區別は一九〇七年サンボン Sinton 氏によりて明かにされた。

これら人體寄生吸蟲類の生活史は最近二十年の間に闡明せられた所であつて邦人研究者の此方面に於ける光輝ある業績は吾人の記憶に新たなるものが多い、其中で最初であつて最も重要なものは日本住血吸蟲に関する研究であつて藤波鑑氏明治四十二年(一九〇九年)の古典的研究を始めとして宮川米次氏(大正元年一九一二年)の體內移行に関する研究、宮入慶之助、鈴木稔兩氏(大正二年一九一三年)による生活史の闡明等相次で現はれ大いに學界を驚かしたものである。これに刺戟されてレイバー Leiber 氏は埃及住血吸蟲及びマンソン氏住血吸蟲の生活史を明かにすることを得た。(一九一五年)「肺チストマ」の生活史は大正四年(一九一五年)中川幸庵氏が蟹の鰓に包囊幼蟲を發見したのを始めとして宮入慶之助、安藤亮、吉田貞雄、小林晴治郎、横川定氏等の研究によつて多くの知見を加へた、大正元年(一九一二年)横川定氏の發見した「メタニムス」の生活史は武藤昌知氏(大正六年一九一七年)によつて肥大吸蟲の生活史は中川幸庵氏(大正十年一九一二年)續いてハーロー Harlow 氏(一九一五年)によつて研究され、肝臟チストマに就いては明治四十四年(一九一一年)小林晴治郎氏が淡水魚が其第二中間宿主であることを發見し武藤昌知氏は「まめたに」の體內で「セルカリヤ」の發育することを證明した、古く埃及に見出された「ヘテロフィニス」の全生活史は漸く最近に到つて淺田順一氏が(一九二八年)これを明かにした。

條蟲が既に希臘時代にも知られて居つたことは上に述べた通りである、有名なる十七世紀の博物家レディー Redi 氏は包蟲が動物であることを認めたと、それが條蟲の幼生期であることは一八五一年、キニツヘンマイスター Kiehlmeister 氏が試食試験を行ふて證明する迄は知られなかつた、有鉤條蟲の生活史はキニツヘンマイスター(一八五五年)ロイカルト(一八五六年)氏等の證明したところである無鉤條蟲も同様の宿主轉換を行ふことはロイカルト(一八六一年)を始めとしモスラー Mosler、オリヴァー Oliver、パロントット Peronotto の諸氏によつて研究され「ニキノコツクス」の生活史はジーボルト(一八五三年)、キニツヘンマイスター(一八六一年)、ロイカルト(一八六二年)氏等によつて闡明されピルハルツ氏がカイロ市で最初に發見した「ナナ條蟲」はグラッシン Grassi 氏が詳細にこれを研究しジョアニー Joyaux 氏(一九二〇年)は中間宿主を要せざることとを云ひ、佐伯義久氏(大正九年一九二〇年)は人體による試食試験によつて尿體のものと人體のものとが恐らく同種なものである事を示した。



據節裂頭條蟲が鱒の様な淡水魚の生食によつて来ることはブラウン(一八八三年)を始め、パローナ Parona (一八八六年) グラツシ(一八八六年)、飯島(一八六六年)チョツケ Nakloke (一八九〇)年等の諸氏の相次いで實驗したところである。比較的近時になつてローゼン Rosen 及びヤニッキー Janicki 兩氏は幼蟲が「けんみちんこ」(Cysts)及び Diptomus)の體內に入つて發育することを發見した(一九一七、一九一八年)これに續いて奥村多忠氏はマンソン氏裂頭條蟲も「けんみちんこ」を第一中間宿主とすることを認め、大正八年、一九一九年)人體寄生性線蟲中、蛔蟲、鞭蟲、メチナ蟲、の四種はリンネ氏の「シヌスマ、ナツター」Systema Naturae (一七五八—一七六七年)中に掲げられたのを見る。ヅビーニ Dabini 氏は一八四三年初めて十二指腸蟲を記載し、一八四六年レイディー Lady 氏は旋毛蟲を豚肉に認めた。パンクロフト氏系狀蟲の成蟲はパンクロフト氏の溙洲で發見したところである(一八七六—一八七七年)。

線蟲の發育史に付ての最初の大發見は、パンクロフト氏系狀蟲の仔蟲「ミクロファイリヤ」が蚊の體內で發育することを明かにした。マンソン氏の研究である。(一八七八—一八七九年)。

「けんみちんこ」がメチナ蟲の中間宿主であることは凡にフエチエンコー Fukushenko 氏(一八六九年)の發見せるところであつて、後マンソン氏(一八九四年)及びレイバー氏(一九〇七年)がこれを追證した。

またロイカルト氏は「ストロンギロイデス、スチルコロリス」の生活史を明かにして自由生活の時期と寄生生活の時期とあることを證明した。

十二指腸蟲に就てはロース「Ross」氏の溙汎な研究によつて一新紀元を劃したと云ふて差支がない(一八九六—一九七年)即ち氏は同仔蟲による皮膚感染を實驗し複雑な體內移行経路を経て腸に達することを證明した。一九〇二年スタイルス「Stiles」氏は西半球の十二指腸蟲が舊大陸のものと同じことを認め、これに Newell Americanus と云ふ名稱を與へた。

強蟲の發育に就ては一八六三年ダウニス Davaine 氏初めて鼠に實驗して腸内での仔蟲の孵化を認め、ルツツ「Lutz」氏(一八八八年)及びエブスタイン「Ehstain」(一八九二年)氏は成熟仔蟲を有する卵を採取すれば成蟲を生ずることを認めた。一九一六年に及びてスチユワート「Stewart」氏が感染経路に關する最初の報告を公にしてから、吉田貞雄、ランソム「Ransom」、フォスター「Foster」、フネボム、淺田等の諸氏の研究相次で現はれ大いに開明の域に達した。

### 文 獻

本書を著するに當り常にその身邊に置いて参考としたのは下記のものである。

1. Braun-Steiert: Die tierische Parasiten des Menschen 1929, P. 1, 11.
2. Mense: Handbuch der Tropen Krankheiten 1927.
3. Faust: Humanhelminthogy 1929.
4. 小泉丹: 人體寄生蟲學
5. 宮川米次: 動物寄生蟲學

## 第二章 寄生蟲の分布

### 第一節 寄生蟲分布の要因

寄生蟲は一般に熱帯、亞熱帯に著しく寒帯に到るに従つて漸減するものであるが、近時大規模の流行學的調査によれば重要な寄生蟲で温帯の地にも廣大な分布を持つものが尠くないことが次第に明かになつて來た又時としては亞寒の地に及ぶものもないではない、之に反し熱帯地方でも砂漠の如く乾燥灼熱して居る荒蕪の地では寄生蟲の發育が不可能なことは云ふ迄もない、約言すれば寄生蟲は第一に氣温によつて發育が支配せられる様である。(土地と寄生蟲の項参照)

次に水或は濕氣が多くの寄生蟲の發育に必須條件であることは既に述べた(土地と水の項参照)そしてある地域の濕潤は雨量、風向、地形殊に山脈の狀態等によつて影響されるもので又氣温にも關係がある、例へばフィジー諸島中のヴィレイヴ島 Vilaiva での狀況を見ると中央に走つて居る山脈が南東の貿易風によつて送られる雨を遮断するから西北部は乾燥して東南部は濕度が高い、そして住民の十二指腸蟲の感染率を見ると濕潤地では九〇%に達するが乾燥地では三八%に過ぎない。

大陸内の高原の様には山脈によつて附近の濕潤地と遮断された土地は常に乾燥して寄生蟲の種類に乏しく、乾燥に對する抵抗力が強い線蟲類及び動物體より直接に感染する條蟲類等のみ生育し得るのである。

印度洋よりの季節風(モンスーン)は亞細亞大陸のヒマラヤ山脈以南の地域に甚大な氣候的影響を及ぼすことは有名な事實である、そして最初はこの季節風(モンスーン)に接觸する海岸地方に於て降雨量最も多く北方及び内陸に到るに従つて雨量が次第に減じ、該地方の寄生蟲溙淫の度は正に雨量と正比例することを見るのである。

支那に於ても同様であつて雨量が一年に七五糶に達せない北部支那では楊子江流域等に比べて十二指腸蟲病の流行が遙かに稀薄で殆んど臨床的の顯應を要しない程である、又シベリヤの様には夏季に乾燥して暑熱甚だしく冬季は寒氣最も激甚なる地方では寄生蟲の發育に最も不適當である、之れに反して馬來群島の様に夏季は雨量多くして暑熱強く冬季も温暖で濕氣の多い地方(平均氣温二五—三〇度)は最も寄生蟲の發育に適して居る、本邦の如きも寄生蟲の發育は可成好適な物理的要因を具備して居る地域と云つて差支がない。

また寄生蟲の分布は宿主の分布狀態と密接な關係がある、例へば中間宿主を要しない寄生蟲又は牛、羊、犬、鼠等人類と切離すことの出來ない關係にある動物を中間宿主とする寄生蟲は人類自身の分布と略々相一致して居る。

しかるに分布の限られた特殊の軟體動物の様なものの中間宿主とするものではその分布状態は明かに中間宿主の分布によりて左右せられるものである。軟體動物のうちには殆んど世界的に分布して居るものもあるが生活區域の極めて狭いものもある。例へば「モノアラガイ」属 *Limnaea* の如きは殆んど全温帯に亘つて生存するものであるから肝蛭病が廣く分布して居るのである。之に反し日本住血吸蟲の中間宿主は特殊の巻貝 *Melampus* 屬でその分布は極東にのみ限られて居るものである従つて同吸蟲病は他の地方に移入さるゝ虞のないものと見て差支がない。同病の流行地を有して居る日本及び支那の間に介在する朝鮮半島に住血吸蟲を見ないのは患者が絶無であると云ふよりも中間宿主である巻貝が棲息して居ない爲であることは疑ないことである。

又一定地域内に於ける物理的環境の僅かな變化、又は住民の風習の相違などが屢々寄生蟲病流行の原因となることがある二、三の例を擧げて見れば前に述べた様に「セントゴットハルト」隧道工事の時十二指腸蟲病の大流行を見たのは労働者が仔蟲の發育に適して居る温潤な土壌と常に接觸しながら勞役に従つたことに因る。又五十餘年前に獨逸の一部で包蟲病の流行したのは住民の間に生の豚肉を好んで食べた習慣があつた爲である。又アメリカでは北部ミネソタ州、ミシガン州、南加奈陀等の湖沼地に擴節裂頭條蟲の移入せられたのは主として該蟲病の流行地である「スカンヂナヴィヤ」地方からの移民の携へ來たのに原因して居る。

其他寄生蟲の分布蔓延の要因としては人間の食物及飲用水にあることは既に述べた。更に寄生蟲の人體に感染する最も重大なる源泉はその排泄物にあることは疑ふ餘地がない。

日本、支那、朝鮮、印度、埃及及びフランスの一部では人糞を肥料として用ふる習慣がある。多くの場合糞尿は液體のまま溜壺に貯藏して腐敗せしめこれを肥料として田圃に散布するものであるが腐敗作用の不完全の爲屢々生卵を混じて寄生蟲傳播の原因となることが多い。糞便の處理方法等に就ては別項に述べる。

歐米及熱帯の多くの地域では人糞は全く利用せられないが特に熱帯地方では野糞の惡習及び排泄物處理の不完全等によつて甚だしく寄生蟲の蔓延を見る地方がある。歐米でも田圃は都市よりも衛生状態が大變不良で糞蟲十二指腸蟲等を見ることが決して少くはない。

最後に移民及び旅行も寄生蟲分布の要因となることが出来る。亞米利加十二指腸蟲 (*Nemat. americanus*) 及びマンソン氏住血吸蟲は黄金海岸及びモザンビック地方よりの黑人奴隷の輸入によつて西半球に齎らされたさうである。

擴節裂頭條蟲が北米に輸入せられて土着となつたのは北歐、中歐の移民によつて齎らされたものである。グリーンング氏はマライ群島及ミクロネシアに於て印度及び支那の移民によつて「アンキロストーマ」が移入された結果同地方の十二指腸蟲感染率に變動を來したことを報告した。又ブラジルへの歐洲移民は在來の「ネカトール」種の上に更に「アンキロストーマ」種を蔓延させるに至つたと云ふことである。

南洋より歸つて來た支那人に依つて中部及び南部支那に「ネカトール」を齎らし更に北支那との交通によつて時に寒冷な地帯にもこれを齎らすことがある。

回々軟の普及せられる地は何處でも有鉤條蟲の患者が少なくその代り無鉤條蟲が地方病として蔓延するのを見る。これは豚肉を食はないで其代り牛肉を食ふためであることは既に述べた通りである。寄生蟲の分布が現今意外に廣汎な地域に亘つて居ることが知らるゝに到つたがそれは必ずしも移民、旅行等によつて蔓延した結果ではない。多くの場合、流行學的調査が次第に大規模になり且つ徹底的に行はれるに至つた結果であると云ふべきであらう。

四十年前（一八八九年）のフアン、ベネデン氏の記事を見ると、擴節裂頭條蟲はロシア、波蘭、瑞西のみならず「ヒメノレビス、ナナ」はアビシニア以外には見られたことがないと記し更に十二指腸蟲は南歐、北アフリカのみならず「ドラクンクルス」は東部及び西部アフリカに限ると信じられ斯の恐るべき「ブルハルチア」は埃及に見出されたのみと記して居る。然しこれを現今の調査及び知識に比較して見ると、寄生蟲學が最近如何に長足の進歩を遂げたかを知ることが出来る。

## 第二節 寄生の分布

### 第一項 線 蟲 類

(一) 糞 蟲 *Enterobius* (*Oxyuris*) *Verruicularis*  
分布頗る廣く最も普通な人體寄生蟲の一つである。神保孝太郎氏は驅蟲法を施した患者一七三名（概ね大人）中五二名（三〇、二%）に蟲體を認めたと云ひ、赤木勝雄氏は二六名に驅蟲を施して九名（三四、七%）に此の寄生を認めた。臺灣では極めて普通である。

(二) 蝨 蟲 *Ascaris lumbricoides*  
分布頗る廣く人類の生活する所で蝨蟲の見られない所はないと云はれる。寒冷な地方よりも温暖の地に多く熱帯、亞熱帯には特に多い。フィンランド、グリーンランドの如き寒地にも見られる。アイスランドには見られないとも云はれる。大人よりは小兒に多く見られ都會よりは田舎の方が遙かに多い。我國では農村に於て四〇—九〇%時にそれ以上に及び都會でも二〇—六〇%に見られる。

(三) 東洋毛線蟲 *Trichostrongylus Orientalis*  
我國にて廣く各地に分布し蝨體の發見される以前には十二指腸蟲卵と混同せられた。現今でも混同される場合がないでもないらしい。朝鮮では日本人に多く朝鮮人に少いと云ふ。支那にも見られることが明かで小泉氏は馬來半島で苦力に認めた。

(四) 「ストロンギロイデス、ステナコローリス」 *Strongyloides stercorialis*

熱帯、亞熱帯の地域では稀でない寄生蟲で分布區域は十二指腸蟲よりも少しく北方に迄及ぶものであらうと云ふ、印度支那には特に多く見られ、支那、臺灣、日本内地にも稀でない様である。歐羅巴でも伊大に見られ獨逸、ベルギー、オランダ、佛蘭西にも散在してゐる。本邦でも多數の報告がある。その内には不確實なものが少くない。(大平得三氏はそれらの批判を試みた)。

(五) 「ラプテイデス、ホミニス」 *Rhankilia hominis*

小林晴太郎氏が高木乙熊氏とともに利根川沿岸の小學校生徒の糞便検査を行った時六七七名中一七名(二、五%)に見出した種類で恐らく我國に普通な寄生蟲であらうと云はれた(大正四年)近時サウンドグラント *Soundgrants* 氏は北米で九名の糞便に本種と思はるゝものを見出した、自由生活性のもが攝り入れたためであらうと見做した。(一九二六年)

(六) 十二指腸蟲 *Ancylostoma duodenale* は歐洲原産の種と考へられ他の地方には *Necator Americanus* の方が多し、本邦でも後者の方著るしく多い様であると小泉氏は云ふてゐる。元來此二種の區別は仔蟲又は成蟲となつては比較的容易であるけれども卵のみでは區別困難であるから一般に混同した成績を以て示されることが多い様である。

廣く且つ濃厚に分布する寄生蟲で南緯三七度、北緯四五度附近に到る間の地域では殆んど見られない地方はなく熱帯、亞熱帯圈内には住民の半數以上に被寄生者を見ることが稀でない。

歐洲にて多く見られるのはシシリ、サルチニアでセルヴィア、ブルガリヤにも少くない伊太利地方では重に煉瓦職工、農夫等に多く見られると云ふ北歐諸國では鑛坑労働者に見られる、往年「セントゴットハルト」隧道工事のときの大流行に就ては先に述べた。されど今日では坑内施設の完成とともに殆んど根絶したものと様である。

アフリカ各地に普ねく分布し、土民の八〇%に見らるゝ地方がある。

アメリカでは南米北部、中米、西印度等に於て著るしく七〇—八〇%の寄生率を報告された地方が多い。

北米合衆國では南部諸州に見られる。南北カロライナ、ジョージア、アラバマ等でスタイルス氏の調査によれば農家の六八%以上に見られ白人の農家には四六%、土人の農家には七九、八%の高きに及んだと云ふ。

歐洲戦争の際、新募集兵に就いての調査によればテキサスのものに六%、ミシシッピのものに三二%、アラバマのものに五五%の被寄生者を見たとの報告がある、コフォイド *Kaufoid* 氏は新募集兵五〇一、四七二名の中、全體としては一一、三%、南部諸州よりの者に一七、〇%最高(ジョージア三二、六%)、北東諸州のものには〇、八%に見たと報告した。

漢洲では地方によつて甚だ多い所もあるが分布區域はあまり廣くない、雨量に關係があると云ふ。

フキジー諸島の一地方では甚だ濃厚な淫浸地があつて慘狀を極めたが防禦作業實施の結果、大いに改善せられた。

亞細亞でも熱帯地が多く、印度、馬來半島、佛領印度支那、比律賓等では被寄生者の割合頗る高く九〇%以上にも及ぶ所が少くない。

支那では殆んどすべての省に亘つて見られ南方地方程濃厚である。

本邦では見られない地方とはなく、ことに農村には頗る高率を示すところが少くない。

(七) 住血糸狀蟲及び「パンクロフト」氏糸狀蟲 *Pihari baneroffi*

熱帯、亞熱帯に分布して居るものである。そして「フィラリヤ」に因る地方病が存在する地方は亞細亞にては印度、セイロン、馬來群島、フィリッピン、安南、交趾支那、朝鮮、日本、ボナベ、ヤツブ等の諸島、アフリカでは本土及び大小の屬島に廣く分布して漢洲ではクイーンズランド及びギルバート、エリス、フキジー、ロヤルタイ、ニューカレドニア等太平洋諸島に最も濃厚に分布して亞米利加では西キヤロライナ、ブラジル、ギナナ、ニカラガ、西印度諸島、北米の南方諸州に分布して居る、歐洲にては西班牙、イタリヤ等に見られた報告がある。

支那には少からず見られる、分布區域は明かでないが南方及び中部支那の沿岸揚子江沿岸に見られ、南方地方には濃厚な淫浸地が少くない様である。

北支那及び滿洲には少い様で、支那本土沿岸に多いのに臺灣には頗る少いのは不思議な現象である。

我國では殊に太平洋に面して居る温暖の海岸地方並びに島嶼に多い。

最も多いのは薩摩及び薩南の諸島であつて沖繩、肥前、肥後、日向等がこれに次いで居る様である象皮腫の地方病的に存在する地方は熊本縣天草島、鹿兒島縣全般特に種子島、大島、甌島、長崎縣下五島、島原、沖繩縣、八丈島、和歌山、静岡、愛媛、高知、島根(隠岐)等である。

なほパンクロフト氏糸狀蟲に近いものでアフリカのみ見られるものに「ロア、ロア」 *Loa loa* 「オンコセルカ、ゾオルヴルス」 *Onchocerca volvulus* 等がある。

八) 「ドラクンタールス、メデイネンシス」 *Draconulus Mehinensis* 「メデイナ蟲」 「ギネア蟲」

東半球熱帯地方に分布して居る。最も多く見られるのはアフリカの西海岸で「ギネア」蟲の稱これより来る(地方によつては土人の半數に寄生を認むと云ふ、亞細亞では紅海沿岸一帯)「メデイナ」蟲の名これに由来す、波斯海、裏海の沿岸地方に分布しトルキスタン、シルダリヤ河畔、印度の諸地方にも見られる、フィジー島にもあり、アメリカではギアナ、ブラジル、西印度諸島で感染した黒人が多く、アフリカから來

た當時には多く見られたが、移民の中絶ともに見られぬ様になつた然し今は地方病となつて残つて居る地方もあると云ふ。

(九) 鞭 蟲 *Trichocephalus trichurus*

分布區域が頗る廣く最も普通の寄生蟲で到るところに少なくない、寒地よりは暖地に多い事は他の腸寄生蟲に同じである。

(十) 旋毛蟲 *Trichina spiralis*

分布區域廣く、歐州では各國何處でも見出され往時は殊に獨逸に多く就中、中部、北部は有名な地域で屢々流行を見た、瑞西、伊太利、佛蘭西、ベルギー、露西亞、波蘭、埃太利、イギリス、丁抹、瑞典等にも分布して居る、又阿弗利加、南北亞米利加、濠洲にも見られる、亞細亞ではシリヤ、印度等に分布して居ることが知られ、支那では豚に普通に見られるが人類の感染例は未だ記載がない。

マックスウエル氏の如きは症例の報告がないから患者が絶無だと考へるのは恐らく誤で誤診せられて認められないのであらうと云つた。我國では未だ見られたことがない様である。

第二項 吸 蟲 類

(一) 肝 蛭 *Fasciola hepatica*

これは所謂「コスモポリタン」で殆んど全世界に擴まつて居り其分布區域は歐羅巴、亞細亞、南北亞米利加、北亞弗利加、濠洲等である。但し人に来ることは稀れである本邦でもごく普通の家畜寄生蟲で東京の屠場の統計は内田清之助氏によると牛には二三%、豚には八%に見られると小泉丹氏は臺灣では屠場に来る黄牛及び水牛の殆んど悉くに見らるゝ様であると云ふてゐる。

(二) 肥大吸蟲 *Paratuberculosis hanki*

印度のブツサム、暹羅、交趾支那、支那、臺灣等に見られる。

支那では楊子江沿岸、南方地方には普通にあるものゝ様で多數の報告がある、すなはち寧波、蘇州、漢口、香港、上海、汕頭附近、浙江省、等から知られて居る、東京に来て居る支那留學生に就いても數次の報告がある。

浙江省では寄生率著しく高く、スキート氏は一箇年の入院及外來患者七三三名中に七一、五%、他の一一四三名中に四〇、八%に卵を見出し、ゴツダルト氏は十七箇月の患者に五五%の蟲卵を認めたと。紹興地方 (*Shaoxing district*) は殊に濃厚な流行地である。パーロー氏の報告によると人體寄生率の頗る高い紹興地方では豚寄生が殆んど見られないのは奇異な現象であつて人寄生のものと豚寄生のものとの相違がある様に思はれるが明かな證據はない。支那人の間にも「人の糞る所では豚になく、豚の糞るところでは人に無し」と云ふ意味の俚言が行はれると、我臺灣では豚に稀でない。

鈴木外男氏の調査によると臺中、臺南地方に多く、六〇%に見られる地方(高雄州左營庄)もありと人體寄生の例としては、マックスウエル

氏の臺南での三例がある。

同氏は二七〇〇名中二名に蟲卵を見出しかと云ふ、大井司氏(大正十三年)は臺南附近の小兒二名に本蟲の寄生蟲症例を見、鈴木外男氏は前記左營庄で糞便検査を行ひ生徒二二〇名中二三名住民八名中に一名の被寄生者を見出し、一名から蟲體を得た。

北村勝藏氏は福岡地方の居住民で本蟲卵を排泄するもの數例を實驗したと云ひ、小田切平三氏も若松市で一回糞便中に卵を見出した由を報じた。しかし母蟲は未だ得られたことはないの確實ではない。殊に「エキノストーマ」類(例へば *Echinostomus perforatus*)の卵子は本蟲卵に酷似するから蟲卵の報告のみでは直ちに信を置くに足らない。

(三) 肺「チヌト」 *Paragonimus Westermanti*

本病は概して山間清流の流域で比較的清潔に見える地方に多く(之に反し肝「チヌト」は平坦の地で河川の下流及び沼澤低濕の地に多い我國では廣く各地に分布して居て頗る重要な地方病の一である、有名な有病地域は近畿では新淀川の downstream 大阪府西成郡神島村(現在大阪市西淀川區神島町)北越地方の新潟縣では(阿賀川信濃川)中蒲原郡、西頸城郡、中魚沼郡等の山間村落に見られる、東海道では静岡縣駿東郡、富士郡、岐阜縣可兒郡(木曾川上流)に、山陽地方では兒島灣及び水島灣に注ぐ諸川(吉井川、旭川、高梁川)の流域、岡山縣では御津郡、兒島郡、上道郡、都窪郡、淺口郡等に散在して居り廣島縣では芦品郡(芦田川の上流)にもある、四國では徳島縣別宮川の流域美馬郡、名西郡名東郡等に九州では對馬(長崎縣上縣郡)等である其他兵庫、奈良、長野、宮城、山口、愛媛、福岡、佐賀、熊本、宮崎、大分、沖縄の諸縣にも知られる。

臺灣では全島に分布し新竹地方に於て最も濃厚で三〇%以上に達する所がある北部に多く南部に少い様である。新竹地方に住んでゐる生蕃間にも多く見られる。

朝鮮では各道に分布し地方によつては甚だ濃厚に蔓延してゐるところがあり、大正十二年六月から同年末迄の間に朝鮮總督府で各道の濃厚有病地を一齊に検査した結果は次の様である。

(検査人員)		(被寄生者數)	
京 畿 道	朝鮮内地人 九、七九六	一〇、一〇一	(一〇、四%)
中 清 北 道	朝鮮内地人 九、二二七	三九五	(四、二%)
中 清 南 道	朝鮮内地人 三、六六七	五二〇	(一四、四%)